

マス沢堰堤整備を考えるワークショップについて

国土交通省湯沢砂防事務所 山口 真司・杉本 宏之(現国土交通省北陸地方整備局企画部)
 ○帆苺 正敏(現国土交通省信濃川河川事務所)
 パシフィックコンサルタンツ株式会社 植村 正・堂ノ脇 将光

1. はじめに

魚野川水系水無川左支川のマス沢(新潟県南魚沼市: 図1)の中流部には、大量の不安定土砂が堆積しており、豪雨時等にこれらの土砂が流出した場合、合流点付近に整備されているキャンプ場やサイクリングロード等の施設や、そこを訪れる人々が被害を受ける恐れがあることから、湯沢砂防事務所では砂防堰堤群の整備を予定している。

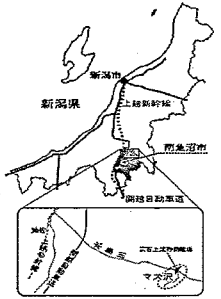


図1 位置図

一方で、マス沢の位置する水無川上流域は水無溪谷と呼ばれ、清流と豊かな自然環境が残された地域であることから、安全な地域づくりのための砂防施設の整備と、豊かな自然環境とが調和した整備を図るため、ワークショップ(以下WS という)により地域住民(地元代表やNPO等31人)の意見を聞きながら、事業実施の有無も含めて検討を実施した。

本稿では、WSにおいて出された住民意見と、全てのWS終了後にWSメンバーに対して実施したアンケート結果より、地域住民の意見の推移や意識の変化について分析した結果を報告する。

2. WSの概要について

平成17年11月から約1年程度にわたり、計7回のWSと現地視察を1回開催した。WSは、WSメンバーと、中立的な立場でWSの進行を担当するファシリテーターによって運営した。住民同士の自由な議論の場を確保するため、行政(南魚沼市、湯沢砂防)は基本的にメンバーからの疑問や質問があった場合のみ回答した。WSは7~8人のグループに分かれて、各グループで意見交換を行いながら意見をまとめ、その結果をグループの代表者が全員の前で発表するという流れで行った。各グループでの意見交換では、付箋紙に意見を書き、それをマス沢周辺の地図に貼り付けながらまとめていくという手法をとった。WSの成果としては、住民との協働作業によって、溪流環境の保全と周辺の利用に配慮した砂防堰堤の整備計画を作ることができた。

3. WS手法及び砂防事業に対する住民意見の推移及び意識の変化について

3.1 住民意見の調査方法

住民意見の調査方法としては、各WSの意見交換において各自の意見を書き込んだ付箋紙、各WSにおいて実施したアンケート結果、及び全てのWS終了後に実施したアンケート結果を基に調査、分析を行った。

3.2 WSで出された意見からわかったこと

マス沢全体について意見交換を行ったWS(現地視察会実施前の第1、3、4回及び実施後の第5回の計4回)において、意見の割合の比較と推移を整理した(第2回は説明会形式による質疑応答、第6回は砂防堰堤の整備方針の検討、第7回は整備構想(案)の作成のため、比較対象としない)。各WSにおける住民意見の割合を「防災の必要性」、「溪流等の利用」、「環境等の保全」の3つの観点から整理した結果を表1及び図2に示す。この結果から住民意見に変化が見られることがわかった。

表1 WSにおける意見割合の比較

	第1回WS	第3回WS	第4回WS	第5回WS
防災の必要性	25.6%	18.3%	19.1%	16.2%
溪流等の利用	13.3%	29.7%	19.1%	16.2%
環境等の保全	27.5%	40.7%	41.6%	29.7%
その他	33.3%	11.0%	21.3%	13.5%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

※第5回WSの防災の意見には砂防えん堤に関する意見を含む

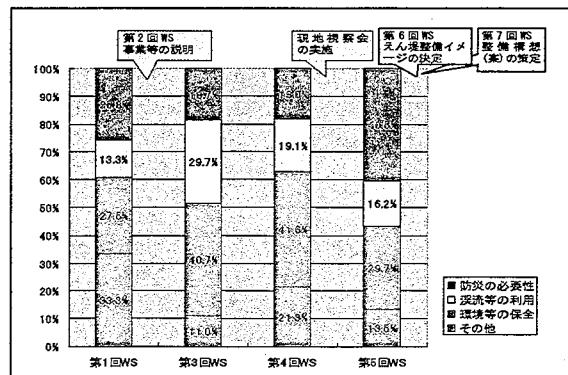


図2 WSにおける意見割合の推移

【マス沢全体の整備に対する当事者意識の芽生え】

第1回では「その他」(事業の必要性やWS運営方法等)の意見割合が多かったのに対し、第2回で砂防対策の必要性や周辺の自然環境、公園整備の状況等を説明した後に開催した第3回では、「溪流等の利用」や「環境等の保全」に関する意見割合が増加した。これは、WSの早期の段階で事業に関する具体的な説明を行ったことにより、住民の間で共通認識や当事者意識が生まれたことが主な理由であ

ると考えられる。その後のWSでは、砂防事業の必要性やWS運営方法といった事柄に議論が後戻りすることがほとんどなくなった。

【防災意識の向上】

現地視察会実施前の第1回、3回、4回では、「環境等の保全」や「その他」の意見割合が多かったのに対し、現地視察会実施後の第5回では「防災の必要性」の意見割合(砂防堰堤に関する意見を含む)が増加した。これは、第4回と5回の実施した現地視察会によって、住民が砂防対策の必要性を理解し、現地に対する共通認識も醸成されたことが主な理由であると考えられる。裏を返せば、現地視察を実施するまでは、住民の防災意識は決して高いとはいえない状況であったと考えられる。その理由としては、土砂災害を経験していないために危機意識が希薄であること、対象地が住民の生活圏から離れているために関心が低く、現地を訪れる機会も少ないことなどが考えられる。

3. 3 アンケート結果からわかったこと

WS手法に対する評価、WS参加による砂防事業や地域づくりに対する意識の変化などについて確認することを目的として、WSメンバーに対するアンケート調査を実施した。結果の概要とわかったことを以下に示す。

【WS手法による住民と行政との協働作業が、住民に評価され受け入れられた】

WS手法を用いた事への評価としては、「やって良かった」「どちらかといえばやって良かった」という回答が全体の9割を占め、「住民と行政が一緒になって意見交換が出来たこと」が評価の主な理由として挙げられている(図3、表2)。WSで住民と行政が意見交換を重ね、計画に反映していく方法が住民に評価された結果であると考えられる。

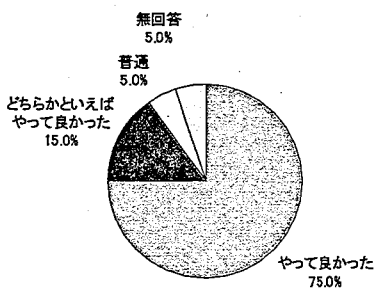


図3 WS手法に対する評価

表2 WSを評価している理由

理由	回答数
●住民と行政が一緒になって意見交換が出来たこと	10
●住民の意識の変化	4
●その他	3
●どちらともいえない	2
合計	19

【WSへの参加により住民の意識変化が図られた】

WSへの参加により砂防対策や地域づくりに対して意識の変化が「あった」という回答が全体の7割を占め、「公共事業に地域の意見・要望を取り入れる姿勢がある」、「砂防対策に環境に対する配慮がある」が主な理由として挙げられている(図4、表3)。WSへの参加により、行政や公共事業に対して住民が持っていた意識(イメージ)に変化が見られたことが伺える。

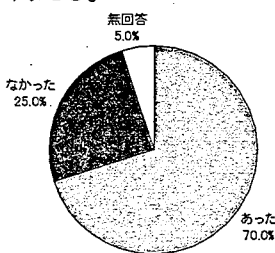


図4 WS参加による意識の変化

表3 意識の変化の理由

理由	回答数
●公共事業に地域の意見・要望を取り入れる姿勢がある	5
●砂防対策に環境に対する配慮がある	3
●住民の意識向上	2
●その他	4
●砂防堰堤の必要性に疑問	1
合計	15

【現地視察が住民に大きなインパクトを与え、意識を高めるのに有効】 表4 現地視察が印象に残ったと回答した人の割合

現地視察に参加した住民で、印象に残っていると回答した人が約9割を占めている(表4)。膨大な不安定土砂の堆積状況を見て危機意識が高まり、周辺状況の確認により住民同士の共通認識も図れたことなど、住民意識を高めるために現地視察が有効であったと考えられる。

4. まとめ

本WSにおける住民意見及びアンケート結果より、WSによる合意形成手法が住民に評価され、受け入れられたことがわかった。また、WSで時間をかけた意見交換の積み重ねを経て、住民に意識の変化(地域づくりの意識や防災意識の向上)が見られたこともわかった。

今回、WS手法が合意形成を図る手段として有効であったこと、地域づくりの意識や防災意識の向上が見られたことから、他地区においてもWS手法を展開していくことは重要と考えられる。

	回答者		現地視察に参加した人		現地視察参加者で印象に残った人	
30代	0	0.0%	0	0.0%	0	-
40代	1	5.0%	0	0.0%	0	-
50代	12	60.0%	7	58.3%	6	85.7%
60代	6	30.0%	4	33.3%	4	100.0%
70代	1	5.0%	1	8.3%	1	100.0%
80代	0	0.0%	0	0.0%	0	-
	20	100.0%	12	100.0%	11	91.7%